

# 2022年度グローバル・スタディーズ研究科研究助成金 研究報告書

グローバル・スタディーズ研究科 地域研究専攻 博士後期課程1年

阿部優子

調査課題名:「現代カイロの街区におけるつながりに関する人類学的研究:街区のモスクに集う人びとの関係性を事例に」

## 1. 研究の概要

私の博士後期課程での研究の目的は、エジプトの都市カイロに暮らす人びとが日常生活を営む街区内で、小規模なモスクといった、人びとが集まる場所に注目し、その場を取り巻く人びとの関係性構築実践の在り方を動的に明らかにすることである。ここで人びとの関係性を捉える際に着目するのは、人びとの相互行為であるが、これに加えて、その行為をする人びとの感情にも着目することで、他者との関係性の中で人びとが日常的に覚える心理的な身体感覚をも包摂した関係性構築における生活実践の解明を行いたいと考えている。

本研究の中でも、助成いただいた2023年1月末日までの期間は特に、博士後期課程での研究の第1段階であり、2023年度より実施予定の本格的な長期現地調査のための予備調査として位置付けられる。今年度は文献調査と短期間の現地調査を実施し、こうした調査を実施する際の文献購入費および現地渡航費として、本助成金を利用させていただいた。

## 2. 文献調査

今年度の文献調査では、カイロの地縁共同体に関する民族誌および人間関係を対象とした研究に関する文献を読み込むことで、人びとの関係性がいかに研究されてきたのかを明らかにしようと試みた。そこで、カイロをはじめ中東やイスラーム地域の地縁共同体に関する民族誌の収集・精読を行った他、人間関係を対象とした他地域で実施された研究の文献にも目を向けることで調査・研究をいかに行うかについてのアイデアを学び取ることができた。これに加え、今後研究を進めていく際の予備知識として欠かすことのできない現代エジプト社会の特徴について論じている文献も扱うことで、エジプトの社会や政治経済の現代の状況の把握にも努めた。

カイロの地縁コミュニティに関する民族誌については、主にテクチェら (Belgin Tekçe, Linda Oldham, and Frederic Shorter. *A Place to Live: Families and Child Health in a Cairo Neighborhood*, Cairo: American University in Cairo Press, 1993.) およびヴィカン (Unni, Wikan. *Tomorrow, God Willing; Self-made Destinies in*

Cairo, Chicago: The University of Chicago Press, 1996.)によって記された文献の精読を行った。テクチェらは、カイロの人びとの健康管理の在り方を、20世紀後半に急増したとされるインフォーマル居住区におけるコミュニティや家庭内での人びとの生活と相互行為に注目して明らかにしている。その中に断片的ではあるが、コミュニティ内の人間関係を利用した相互扶助の描写があり、伝統的な街区と新しく生まれてきたインフォーマル居住区では、その協働的な人間関係に類似点が存在することが明らかになった。

ヴィカンによる文献では、カイロの経済的に貧しい地区での聞き取り調査をもとに、読み手がワールドの情景を思い起こすことができるような詳細な民族誌的記述がなされている。本著の中にはエジプトの街区の小路や袋小路についての描写や人びとが街の中で行う相互行為のエピソードが多く記されており、民族誌的記述の方法として参考になった。

私は、これまで文献調査を主な手法として、ジェンダーを問わず街区に暮らす人びとのつながりに関心を持って研究を進めてきた。しかしながら、実際に現地調査を実施する場合、より頻繁に接触可能であるのは街区に暮らす「女性」たちであると推察される。上記の2冊の文献はカイロに暮らす女性や子どもたちを主な対象とした調査の成果として著されており、これらの文献を通じて1980～90年代の人びとの日常生活の様子や価値観を学ぶことができた。

研究地域を超えて、人間関係を対象とした研究に関する文献ではボワセベン(ジェレミー、ボワセベン『友達の友達:ネットワーク、操作者、コアリッション』未来社、1986年。)および中屋敷(中屋敷千尋『つながりを生きる:北インド・チベット系社会における家族・親族・隣人の民族誌』風響社、2019年。)の文献を利用した。ボワセベンがイタリア社会を対象に、網の目状に人間関係を描き出すネットワーク分析の手法を用いた研究を実施した。本文献を通して、人の関係性の研究には人類学や社会学の分野を跨って多様な手法が存在すること、そして本著で扱われているネットワーク分析の手法を学ぶことができた。

中屋敷の文献では、北インドのチベット系社会の人間関係を対象として研究する際に、人びとの人間関係における戦略的な特徴のみならず、他者と関係を結ぶことに喜びや興奮を覚える反面、気持ちの重さを感じるといった人びとの感情や感覚に関わる特徴や社会の中で「このようにあるべき」とされる理想的な関係性を生み出そうとするような規範的な特徴も視野に入れた研究を行っている。これに対し、本研究の対象地域であるカイロにて人間関係に注目してきた先行研究では人びとの関係性のネットワークは、日常の困難を生き抜くために構築され、利用されるという戦略的な特徴に傾斜して捉えられてきた。本著を通して、ある人間関係に対する人びとの感情や規範的な側面にも注目することで、人びとの日常的な関係性構築実践へより接近することができるという今後の自身の研究の発展に資する研究の視角を得ることができた。

また、現代エジプト社会の特徴について論じている文献については、シムス(David, Sims. *Understanding Cairo: The Logic of a City Out of Control*, Cairo: American University in Cairo Press, 2012.)およびファフミー(Ziad, Fahmy. *Street Sounds: Listening to Everyday Life in Modern Egypt*, California: Stanford University Press, 2020.)の文献を用いた。シムスは、エジプトの社会経済的背景を踏まえながら現代カイロの都市開発の歴史とその現代における展開の様相を描いている。都市開発における住居やそこに暮らす人びとのコミュニティに目を向けた本著は、現代カイロにおける居住区コミュニティを対象とする本研究の先行研究として、居住区を取り巻く社会背景を知る上で重要な文献であった。

ファフミーは、エジプトが近代化していく中で日常のサウンドスケープがいかに変容したのかを社会や経済の変容とともに描いている。本書の特徴は、五感のうちの視覚に偏重した研究視点を批判し、人びとが生きる日常を理解するためには、ここで取り上げられる聴覚のように「実体のないもの」も分析の対象に含めるべきだと論じている点である。本研究では、人びとが相互行為を行う際に感じる感覚を分析・記述の対象に含めたいと考えており、「実体のないもの」を研究対象に据える点で、ファフミーの研究と類似していると言える。地理学者トゥアン(イーファー・トゥアン(1988)『空間の経験: 身体から都市へ』山本浩訳、筑摩書房、1988年。)は「感情は主観的な状態を指し、思考は客観的現実を伝えるものである」という一般的な考えの傾向に対して、感情も物事を理解する重要な方法の一つと述べている。しかし、「実体のないもの」を研究対象とした際に、その研究を成果としてどのように表現するのか、その方法を提示した先行研究は少ない。今後はそうした研究手法に関する文献を収集しつつ、「実体のないもの」を対象とした研究成果をいかに表すのかを探求していきたい。

### **3.短期現地調査**

現地調査は、2022年8月11日～9月10日の期間にエジプト・アラブ共和国、カイロ県ダルブ・アフマル地区に滞在しながら、この周辺地区にて実施した。本調査の内容は以下の通りである。

#### **◆街区内のどのような場所に人びとが集まっているのかについての聞き取り調査**

街区では伝統的に、そこに暮らす住人たちが共同で利用する場所が多々存在することが知られてきた。こうした場所には、小規模なモスクを始め、ハンマームと呼ばれる公衆浴場やサビールと呼ばれる給水施設、パン焼き窯などが挙げられ、街区内では伝統的に、公共的に共同利用する場所に人びとが集まっていた。現代にも見られる場所としては、喫茶店や小さな工場、商店の前に人びとが集まり、茶を飲んだり、情報を交換したりするような関係性が存在することが先行研究の中で指摘されている(Mohamed Gamal, Abdelmonem. “Understanding Every Homes of Urban Communities: The Case of Local Streets (Hawari) of Old Cairo” *Journal of Civil Engineering and Architecture*, 5(11): 996–1010, 2011.)。実際

に私自身が現地で調査した際にも聞き取りの中で、人が集まる場所としてこうした場所が挙がり、まちを歩く中で人びとがこのような場所で交流する様子を頻繁に目にした。

#### ◆人びとがモスクに通う様子の観察

礼拝の時間帯に道を行く人の中には目の前のモスクを素通りして、さらに先にあるモスクに入っていく人びとが一定数いたり、2人で連れだってモスクに入っていく光景も目にした。そのため、ある人物がどの特定のモスクに通うのかには、物理的的近接性や目的、その場で出会うであろう人物との関係性など様々な要素が複雑に絡んでいると推察された。

カイロ県ザーウィヤ・ハムラ地区において人類学的調査を行ったガンナム(Farha, Ghannam, *Remaking The Modern: Space, Relocation, and The Politics of Identity in a Global Cairo*, California: University of California Press, 2002.)によれば、この地区に暮らすある女性は、彼女が住まう集合住宅の周辺に位置する多くのモスクの中から6つのモスクを彼女の日常生活に沿って、目的や用途ごとに選んで通っていると述べられている。本事例はムスリムが自分自身の通うモスクを選択する可能性を持ちうることを示唆しているが、彼女は、それぞれのモスクにおいて同じモスクに通う友人たちと強い関係性を築き、その関係性を重要視しているとされており、人びとは通うモスクを選択する際に、完全に自由な行動主体なのではなく、その選択には個々人が持つ人間関係も絡んでいると考えられる。

本調査を踏まえ、今後実施を予定している長期的な現地調査の中では、現地の人びとが街区のなかでどのような社会的立場にあり、それぞれがどのような関係性を取り結び、その関係性がいかに維持・変容しているのかを把握しつつ、具体的に調査対象とする街区内のモスクを定め、個々人の相互行為に注目しながら、そこに通う人びとの関係性の動態を明らかにしていきたい。

#### 4.研究成果の公表

今年度の研究成果については、以下の研究会にて口頭発表を実施した。

- ・渡航報告「エジプト渡航報告」(中東イスラーム社会若手研究会「渡航報告会」、於Zoom、2022年9月27日)
- ・研究発表「現代カイロの街区コミュニティの人類学的研究:人が集う場と人びとの関係性に注目して」(上智大学アジア文化研究所「2月所内研究会」、於Zoom、2023年2月16日)

#### 5.おわりに

本研究は、2022年度グローバル・スタディーズ研究科研究助成金の受給により実施することができました。本助成金の事務手続きにおいてご尽力いただいたグローバル・スタディーズ研究科事務室の佐能様および指導教員である赤堀先生に、深く感謝申し上げます。